

「涵養・訓練・調教」

物質的發展をとげたものの、わが国にはいまや内面からの崩壊の兆しが見える。これまでも民族の閉鎖的、集団同調的、幼児的精神性が指摘されてきた。集団規律にうわべを覆われて見にくかった個々人のこの精神性が表面化してきたと思われる。明朗な、自律的、自己に責任を負う、成熟した精神が社会の主潮となるより他に、わが国がこの危機を脱する道は見つからない。それには、思春期までの幼少年をそのような人格たらしめる教育を再建の礎とせねばならない。ところで「教育」と呼ばれるものに少なくとも三種の範疇が含まれる。この三種を混同すると、「教育」の有効な手立ては生まれない。

「教育」と言うときたいがいは「訓練」を指している。「訓練」は知識技能の習得を目的とする。習得は意志とエネルギーがあれば万人にとって可能であり、黒板や書物の文字、視聴覚材料、技能の補助装置などでカリキュラムを作成することができる。もしも、意義も認めず意志も不在であれば、知識技能を目指す行いは強制されるものとなり「訓練」ではなく「調教」となる。さてここに、カリキュラム作成不可能で習得も調教もできないものが教育のなかにある。知力、胆力、集中力、決断力など、押し並べて言えば「力」である。それらは「養われる」のであって習得されるのではない。単純に言葉や図形や数値では表現され得ない。力は人間人格の属性であって、個々人の人格から切り離して取り出すことはできない。教育のこの範疇を「涵養」とでも呼んでおこう。

幼年期には訓練は成り立たない。躰は調教である。ところが何よりも重大な意味を持つのは涵養である。環境の中であってひとりでに養われるものである。幼年時代の環境こそ人間の先行きを決める。幼児は遊ぶだろう。その遊びが、山積みされた出来合いの模造品のなかに閉じこめられて、そのうえに干渉されて最初から最後まで徹底できなかったとしよう。何かにつけて調教される環境のなかで育った幼児に何が涵養されるだろうか？ かれは喜びも悔しさも感情の小部分さへ経験しない。身体（脳も一部）を使いきる機会はなく工夫することもまずしい。一方、テレビやバーチャルリアリティや安手のおもちゃなどの偽物を退けて、何物であれ本物がむき出しにある中に置かれて、土壇場まで干渉されずに遊びをやりきって育った幼児に涵養されるものは何だろう？ 最初から自分の身体を駆使して、納得する最後まで力を出しきることができるだろう。喜びも悔しさも感情は深くなるだろう。

この二人において涵養されるものはおのずと異なる。つまり、養われる力が違い人格は雲泥に開く。情緒豊かな知的な人間を求めるなら、幼児における調教は危険を避ける程度に止めおかねばならない。

少年期に入ると訓練の要素が加わってくる。もし少年が自律的意志的に幼年時代を過ごしてきたら、この期には付和雷同を嫌い調教を拒絶し、おのずから高い訓練

に心惹かれる。そして力はより強く養われる。訓練の力点が知識技能の習得に置かれすぎると（学習塾、稽古事、スポーツにしばしば見られる）、訓練は調教と化すので、かれはそのような涵養されるものが痩せた訓練を苦痛と感じて忌避するだろう。ところが幼年期に涵養が貧しかった少年はむしろ調教になじみ、貧しい人格へとさらに歩みを進めることになる。高く涵養される訓練には取りかかることもできなければ、ついてまこれない。

幼少年期の環境はもっぱら親の言動そのものである。ここにわが国の根本的困難がある。わが国は涵養が貧しく集団規律で調教されてきただけだった。涵養が貧しかった親は子にとっての貧しい環境にしかならず、その言動は毎日、子を調教へと駆り立てる。集団子育ては大掛かりな調教システムでしかない。

わが国の再生のスタートは、どこから始めればよいのだろうか。この子の親は自分のほかはないという真実を引き受けて、良き涵養の場であろうと自覚した父親と母親たちが乳幼児のところに帰ることである。柔肌と鈴の声としなやかな乳首が豊かな涵養の最初の環境となるだろう。何ごとによらず、模造品ではなく本物でなければならないのである。

(2000)